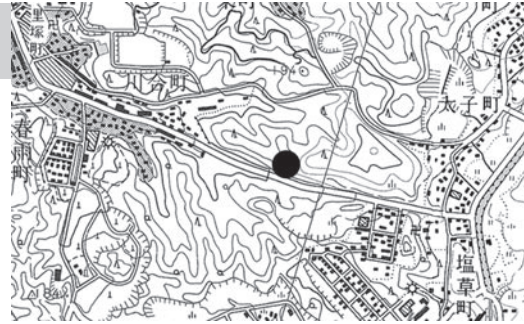


かわい
川合D窯跡

所在地 瀬戸市川合町地内
 調査理由 主要地方道瀬戸設楽線道路改良
 調査期間 平成15年10月～12月
 調査面積 250㎡
 担当者 藤岡幹根・酒井俊彦・鶴飼雅弘



調査地点 (1/2.5万「瀬戸・猿投山」)

調査の経過 川合D窯跡は、瀬戸市川合町地内に所在する。調査は主要地方道瀬戸設楽線道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より委託を受け、平成15年10月から12月にかけて実施した。調査面積は250㎡である。

遺跡の立地 遺跡は菱野丘陵東部、市道塩草線万徳峠から西に展開する谷の北側標高約164mに位置する。周辺には万徳峠窯跡・川合C窯跡・川合F窯跡・太子A窯跡など中世の山茶碗・施釉陶器の窯跡が集中する。また赤津川を隔てた対岸には、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である惣作・鐘場遺跡がある。

調査の概要 調査の結果、南南西方向に伸びる沢に灰原が形成されていることが確認された。灰原は約1mに渡り堆積しているが、上部は治山工事や度重なる盛土造成により削平されている。また、灰原の南側は道路建設時に削られている。灰原の形成は大きく2時期に分かれる。下層では南部系山茶碗・山皿、片口鉢など、さらに最下層の灰白色シルト層からは灰釉四耳壺・瓶子が未焼成の状態で出土した。出土遺物から13世紀後半から14世紀前半にかけて操業していたと考えられる。上層では匣鉢とともに天目茶碗、灰釉四耳壺、花瓶、柄付片口などが出土した。出土遺物から14世紀、いわゆる古瀬戸中期末の様相を示すが、出土遺物に現代のものを含むため、二次堆積の可能性が高い。

まとめ 出土遺物から、窯跡は13世紀前半から14世紀半ばの間、複数の窯の操業を想定する結果を得た。窯体については調査区内で確認することができなかったものの、埋積土中に窯体の破片を含む層があることから、一部もしくは全体が破壊されている可能性がある。

(鶴飼雅弘)



灰原完掘状況 (南から)



古瀬戸前期四耳壺出土状況